

小学校英語教育における国際交流の役割と意義

The Role of International Exchange for Elementary School English Education

山本 淳子
Junko YAMAMOTO

1. はじめに

2011年度からの小学校英語活動の必修化に向け、今年4月より前倒しで外国語活動が実施される。2002年の学習指導要領のもとでは「総合的な学習の時間」内に各校でそれぞれ独自に「国際理解教育」の一環として英会話活動などが行われたが、新指導要領（2008）においては「外国語活動」の枠組みの中で国際理解教育が取り扱われることになり、以前よりコミュニケーションに重点が置かれている¹。コミュニケーションの手段としての英語活動を考える場合、異文化理解が不可欠な基盤である。これは英語教育界で課題とされていることである（日野 2008）。小学校においても今後、様々な試みがなされていくことが予想される。その試みの一つとして、国際理解教育と外国語活動を結びつける国際交流の実践を行った。これまで小学校の英語教育では特に焦点が置かれることのなかった英語の読み・書き活動も導入した。これらの実践の内容と英語学習に対する動機面の成果を報告する。

2. 動機付けについて

言語習得において英語学習動機は重要な要因であり小学校における外国語活動においても重要な意味を持つと考える。この動機についてはinstrumental motivation（道具的動機）（第二言語を学習して実利的な恩恵を得たい）とintegrative motivation（統合的動機）（第二言語が話されている社会に興味を持ちその社会の一員になりたい）という二種類に分類される場合があり、中でもintegrative motivation が、第二言語習得を成功させる鍵を握るとされている（Gardner & Lambert 1972）。ただし、英語文化に溶け込むことに緊急性がない日本での英語学習環境を考えた場合、「統合」の度合は低い。日本の小学生が英語を話すコミュニティーに統合する気持ちを持つということは考えにくい。そこで本研究では、学習者自身が自ら進んで意義を見つけ楽しむのために学習をするintrinsic motivation（内発的動機付け）と学習結果などの報奨のために学習をするextrinsic motivation（外発的動機づけ）に分類する。この場合、内発的動機付けが本質的動機付けで、

後者が人為的な動機付けであるとされている（五島 1983）。言い換えれば、前者の児童は学ぶことそのものの意義を認めて学習し、後者の場合は良い成績をあげることで得られる報酬を求めて学習する。Ryan and Deci（2000）は様々な実験結果を踏まえて、外発的動機よりも内発的動機付けが優れた学習結果を生むと述べている。Williams and Stockdale（2004）も内発的動機が外発的動機より望ましいとし、内発的動機を持つ生徒は教師の介入がなくても自らが主体的に学ぼうとするという理由をあげている。

Brown（2000）は、長期的な学習には、自己の成長を目指して学習しようとする内発的動機が重要になるとしている。成績が主な外発的動機を高める要因である（Deci and Flaste（1995））ことから小学校の外国語活動において「成績をあげたいから」「入試のため」といった外発的動機を持つことは少ない。この時期にこそ、意欲的な態度を育て内発的動機を高めておきたい。特に、高学年の子どもは「意味のない繰り返しに抵抗を感じ、目的のはっきりしない活動を嫌がるようになる」（朝比奈 2008）傾向にあり、人前で話したり間違えたりすることについての恥ずかしさを感じるようになる。発達段階を考慮に入れながら、彼らの知的好奇心を満足させる工夫が求められる。また、中学校以降の学習への動機付けとなるような活動を考えることも重要であろう。

そんな高学年の児童のニーズに応え、国際理解と英語教育をつなげるための方法として海外の子どもたちと国際交流を行った。日本の言語や文化を発信しながら英語が話されている国々に興味を持たせられるほか、交流を通して、読み書き学習に対する心構えを涵養することがねらいである。本研究では、日本の3小学校の高学年5クラスが、海外の子どもたちと手紙やメールで国際交流を行った。この実践の前後にアンケートをとり、実践に対する子どもの反応を調べ、英語活動に対する動機付けについて考察を加えることとした。

3. 小学校英語教育における「国際コミュニケーション力」

新学習指導要領には、五年生、六年生の共通の内容として「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様な物の見方や考え方があることに気付く」「異なる文化を持つ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること」と書かれている。そのためにはできるだけ異文化と接する機会を設けることが必要となる。必修化に合わせて文部科学省が試作した「英語ノート」で学んだ単語やフレーズを実際の交流で使うことで、「英語ノート」の存在意義は大いに高まる。ALTや担任などの指導者との会話に加え、授業の枠を飛び出して、英語を話す同年代の子どもたちと交流する真のコミュニケーションの場を設けることは英語活動に対する意欲につながるのではないか。

これまでの国際理解教育においてはアメリカの文化紹介や極端な場合、アメリカ文化礼賛につながりかねない英語活動が目立っていた（菅 2008）。単に欧米の文化についての知識を提供するだけでは「日本的なロジックや言語文化を否定」（金森 2003）することになる恐れがある。異文化を伝えるには一つの文化に偏らないようにすべきであろう。国際交流相手を選ぶ際にも注意したい。

国際交流の場合、相手によってやりとりにかかる時間も異なり、これを英語活動の中心に据えることは難しいものの、通常のカリキュラムで学んだ表現を使う場、国際理解を深める手段として年間6～7時間(今回の実践の平均)、交流相手によってはそれ以上組み入れることも可能だと考える。これまでの経験において、交流相手の子どもやその指導者が日本語を学んでいたり、日本に興味を持っていたりすると両国の指導者、子どもにとってのメリットとなり、準備にかける負担も軽減され、ひいては交流が長続きすることがわかっていた。そこで本実践では日本語を教科や課外活動で学習していることを条件に交流相手を捜した。その結果インドとオーストラリアの10歳から13歳の子どもたちとクラス単位での交流を行うことになった。インドのA校は日本語の授業があり、オーストラリアの二校においては正規の日本語の授業はないものの、異文化教育の一環として「さくら」などの日本語の歌を歌わせたり日本の物語を英語で読み聞かせたりしている。インドのA校はインドの教育を研究中の研究協力者を通して、オーストラリアのB校は日豪交流の活動を紹介・斡旋している現地のAustralian Recreation & Education Tour、C校はインターネットを通して確保した²。

4. ライティングの導入について

英語との出会いを肯定的に、そしてその言語が話されている国に対する関心を高める方法としてウェブカメラやビデオレター交換と、手紙やEメールを利用した交流を予定したが、前者は相手国(インド・オーストラリア)からプライバシーの問題で難しいと伝えられたため、後者の手紙・Eメール交換に限ることとした。

このような交流を行う場合、障壁となるのが英語の読み書きの問題である。小学校の英語活動では、歌やゲームなどを利用したリズムカルなアプローチで楽しく英語に親しませることが重要とされており四技能の中でも、話す・聞く能力を伸ばすことが第一目標(小池編 2004)とされ、英語の読み書き指導については「英語嫌い」を生むとして消極的な扱いであったが状況は変わりつつある。文部科学省では、平成21年度からの研究開発事業で、現行の「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動型の指導に加え、「読むこと」「書くこと」も含んだ4技能の指導を重視する小学校を教科型として指定することが決まっている。研究結果を踏まえて、今後の早期必修科のあり方が決まると考えられるが、中・高との連携も念頭に4技能を磨く授業をすることが求められる可能性も高まっている。

高学年(11歳、12歳)はピアジェが示した「形式操作期」に入り、分析的思考を持って、言葉の規則に強い関心を抱くようになるとされているので、この成長段階に合う英語教育を展開させるべきである。アレン玉井(2009)も自らの経験から子どもが「英語が楽しい」から「英語ができる」へと成長するためには、効果的なリタラシー教育が不可欠であることを悟ったとしている。高学年の児童に内発的動機を持たせるためには文字学習の導入は意義があると考えられる。

読み書き指導を取り入れる根拠として、学校でのコンピュータ及び、子どもがアクセスできるネットワーク機能が充実しつつあることがあげられる。子どもたちはキーボードでローマ字入力するこ

とに慣れてきている。また、文字はより豊かな言語活動を促すうえ自習を可能にし習得材料をひろげるし（JASTEC 関東甲信越支部 調査研究プロジェクト・チーム 1999）E-mailは返事が書きやすく相手への興味や好奇心を喚起し、相手に伝えたい事項が生じてくる（國本 1998）。このような実態を踏まえ、言語が話されている国の子どもとの交流をしたいという興味を持たせるために簡単な読み書き練習を行わせることとした。

5. 研究実践の概要

目的：海外の子どもたちと手紙やメールで国際交流を行った結果、子どもたちの英語活動に対する動機付けについてどのような効果がみられたかを調べる。

対象児童：日本児童5、6年生 121人（愛知県内M小学校6年生2クラス（以下A6）66人、新潟県内H小学校5年生2クラス64人（以下N5）・N小学校6年生23人（以下N6）³

交流校：オーストラリア・ウーロンゴン K小学校 22人、オーストラリア・シドニー A小学校 18人、インド・デリー B小学校 30人（10歳から13歳）

交流期間：2007年7月より2008年3月まで

交流方法：クラス単位での文通、作品交換による交流を中心とした。メッセージの内容は自己紹介、自国の文化の紹介、相手の国に関する質問など。

二カ国語の交流を希望したもののオーストラリアの子どもたちは日本語が書けるまでに至っていなかったため日本語を学習するインド人小学生と交流したN6のみ、日本語と英語で交流し、A6とN5は、ALTや担任らの指導のもと、英語のみで交流した。

手紙の作成のために、指導者が何種類かのひな型を用意し、そこに子どもが単語や短い文を書き入れる（資料1）方法をとった。またもらった手紙をもとにオーストラリアの文化をALTと学習したり、わからない単語について教室に備え付けられた児童用英和・和英辞書で調べさせる機会を設けた。このような交流は、各校二往復行った。手紙を書いたり、相手からのメッセージを理解させたりする時間に加え、各校が独自の国際理解学習（相手国の文化を学ぶ機会を設け、その内容をポスターにまとめ文化祭で展示をしたり（N5）、自校の紹介をまとめてビデオレターにして相手国に送ったりした（N6）。A6はもらった手紙を利用したゲームを行い、手紙の内容の理解を深めた。これを4時間から5時間の間で実施した。

指導者：担任とALT、日本人指導者（研究協力者）が担当した。

調査方法：交流を始める前に英語学習についての意識と読み書き練習についての英語学習に対する意欲や関心を調査し（プレアンケート）、その結果を参考にして交流の内容を構成した。交流後読み書きへの興味関心と意欲面の変化を内容分析を通して仮説の検証を行った（ポストアンケート）。

6. 仮説

日本の小学生（高学年）に同世代の英語話者たちと交流する（手段：手紙やEメール）機会を設けることが、英語の実用性を理解させ、学習者自身が自ら進んで意義を見つけ楽しむのために学習をする内発的動機につながると考える。

7. 研究結果

7-1 プレアンケートについて

交流を始める前に、日本の子供たちの英語学習、及び英語で読み書きの練習をすることに対する意識を調査した（資料4）。苦手意識を持つ子供や、英語での読み書きに対して抵抗感を持つ子供の存在をあらかじめ知ること、指導の参考にすること、ポストアンケートと数値上の比較を行うことが目的である。

英語学習が好きかとの質問に対し、全体の回答は約70%の児童が「好き」あるいは「まあまあ好き」を選び、三クラスとも児童の過半数の子どもが「好き」あるいは「まあまあ好き」を選んだ（N5：81%、N6：72%、A6：53%）。好きな理由を選択肢から複数回答であげてもらったところ、多い順に（括弧内は総数）1. 英語の時間が楽しいから（108）、2. 英語を話せるようになりたいから（103）、3. 中学の勉強に役立つから（91）、4. 外国に行きたいから（70）、5. 外国の人と友達になりたいから（59）となった。一方「あまり好きではない」あるいは「嫌い」を選んだ子ども（153人中16人）にその理由を聞いたところ、多い順に、1. 英語の時間が楽しくないから（17）、2. 英語を話すことが好きではない（13）、3. 簡単すぎるから（9）、4. 難しすぎるから（7）となった。英語嫌いを減らすためには、児童の好奇心を刺激したり、レベルの異なる活動を盛り込んだりという工夫が指導者側に求められる。読み書き練習については、全体の77%が「したい」あるいは「まあまあしたい」を選択しているほか、各学校別の結果でも過半数の子どもが意欲的な姿勢を示し、まだ一切読み書き学習を始めていないこの時点ですでに高い動機付けを持っていることがわかる。なぜ読み書き練習をしたいかという問いに対しては、「書けたり読めたりしたい」が46%、「おもしろそうだから」が32%、「中学の勉強に役立つ」が14%、「コミュニケーションの手段として」が6%となった。過半数の子どもたちが英語学習に好感情を持っていること、英語の読み書き練習を希望していることがわかったが英語で実際に交流したいという願望を持つ児童はこの時点では少数派であった。

7-2 ポストアンケートについて

海外の子どもと交流した後、その交流に対するアンケートをとった（資料5）。その結果（数値・自由記述内容）を分析して、実践が動機付けにつながったか、もしつながっていたとしたら、その

内発的動機および外発的動機の内訳はどうなっているかについて調査した。本研究に關係する1から4の質問の回答（5段階および自由記述）を分析対象とした。回答の分析にあたり、すべての自由記述のセンテンスを意味のまとまりごとに分類したのち集計し、「積極的・肯定的」記述と「消極的・否定的」記述に分け、数の比較を行った。次にそれぞれの自由記述の中から異文化交流と英語学習に関する記述を抜き出し、キーワード・キーフレーズにまとめて、その出現回数を集計した。これは5段階の回答集計数のみではわからない、子どもたちの実践に対する意識を表面化させることを目的としている。

7-2-1 五段階回答（質問2, 3）

質問2：もっと海外に友達を作りたいと思うかに対して「そう思う」と「少しそう思う」を合わせると全体の90%の児童が海外に友達を作ることに肯定的な回答をしており（図1）、交流活動が好意的に受け止められたと考える。質問3：交流後、読み書き練習をもっとしてみたいと思ったかにおいても「したい」、「少ししたい」を合わせると約80%が読み書き練習を希望している（図2）。ただし、交流前の結果と比べると、内訳の内容が変化している（図3）。交流前と後で「したい」、「少ししたい」を選んだ子どもの割合はそれぞれ79%、80%と微増しているものの、交流前に「したい」を選んだ子どもが交流後に「少ししたい」に移行しているのがわかる。また「あまりしたくない」「したくない」が交流後で微増している。これは、実際に英語で交流をしてみても読み書きに対するハードルの高さを感じたり、思ったことをうまく書き表せなかった不満などを感じた子どもがいたため

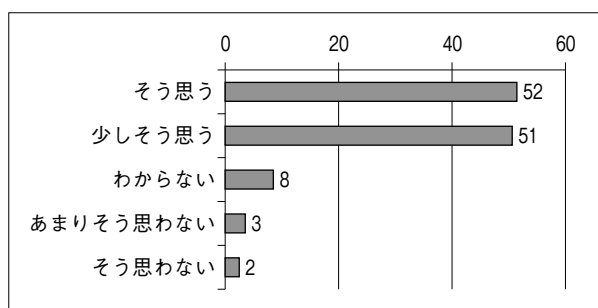


図1 質問2(n=116)

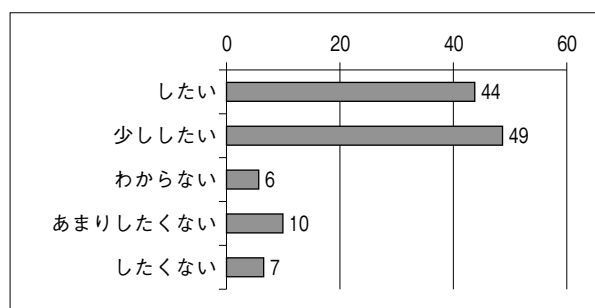


図2 質問3(n=116)

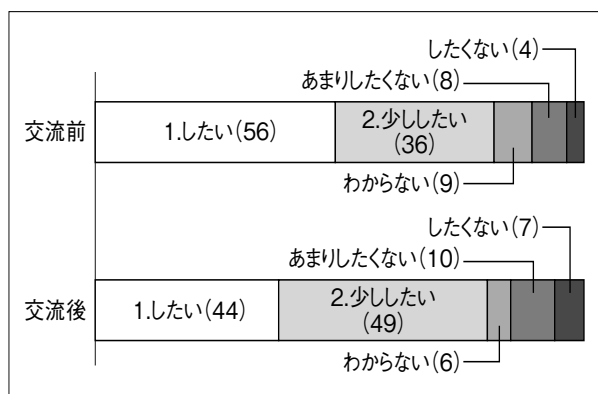


図3 比較調査 英語の読み書き(全体) (n=116)

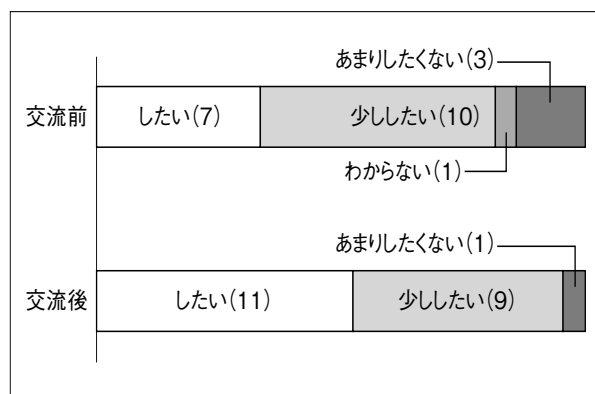


図4 比較調査 英語の読み書き(N6) (n=21)

ではないかと推測する。インドの小学生と日本語と英語の二ヶ国語で交流したN6では全体の結果から比べると、わずかではあるが学習への意欲の伸びが大きい（図4）。これは届いた手紙の難易度に負う部分が多い。簡単で短くして欲しいと要請したが、オーストラリアから届いたメールや手紙は同じ国の同世代に書く内容と同等と考えられる（資料2）。一方、インドの子どもたちは習っている日本語を交え簡単な英語で返事を書いている。外国語を学ぶ日本人の立場を知った上で書かれたメッセージがほとんどであった（資料3）。今後の検討課題である。

7-2-2 自由記述（質問1, 2, 3, 4）

質問1から4の自由記述すべてを概念単位で抽出した結果、総数は584あった（図5）。それを肯定・積極的記述（例：楽しい、交流したい）と否定・消極的記述（例：おもしろくない、難しい）に分けたところ、前者が517記述、後者が67記述と、前者が後者を上回りその差には統計上の有意差がみられる（ $P=0.001131 < 0.01$ ）。質問1：交流についての第一印象（図6）では「うれしい」（64）という好感情を示す子どもが目立つ。次に「相手の国などの様子がわかってよかった」（14）という感想が多かった。否定的意見では「英語が読めない」（22）ということばの問題を指摘する記述が大半である。質問2：もっと海外に友達を作りたいと思うか（図7）についても「異文化を知ることができる」、「うれしい」、「楽しい」といった肯定的意見が全体の8割を占めている。質問3：交流後、読み書き練習をもっとしてみたいと思ったか（図8）に対しても、学習に対する積極的な記述が目立ち、この質問についての肯定的意見は全体の9割弱を占めた。質問4：全体の感想（図9）においても交流を通して意欲が高まったという記述のほか「またやりたい」「英語が必要だとわかった」といった肯定的記述が9割以上だった。否定的記述で中心となるのは、質問1では「英語が読めない」（22）、質問2では「言葉が通じない」（8）、質問3と4では「難しい」（合計17）など英語に関する問題であった（こういった感想を記述した同じ子どもが、別の質問で「交流は楽しい」、「続けたい」といった肯定的意見を書いている場合もあり、ことばの問題が異文化交流に対する否定的態度に直結するものではない）。苦手意識を持つ子供に対し適切なアドバイスを行うなど個人的な

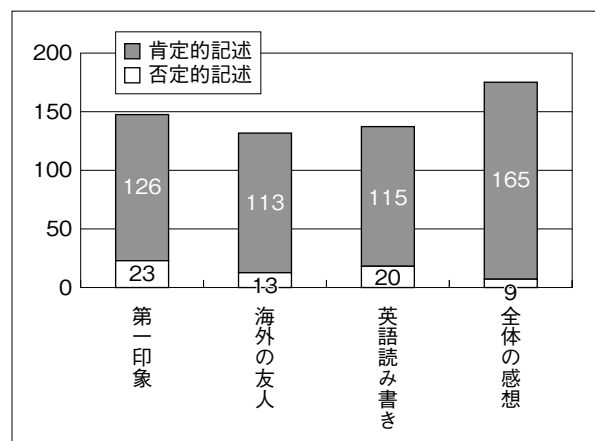


図5 交流後調査（質問1－質問4自由記述の数）
複数回答（総数584）

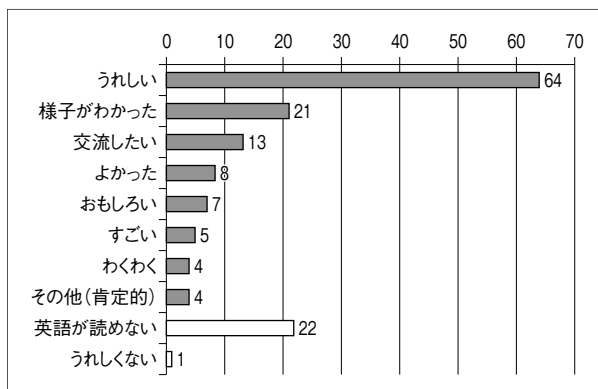


図6 質問1 (交流第一印象)MA(総数149)

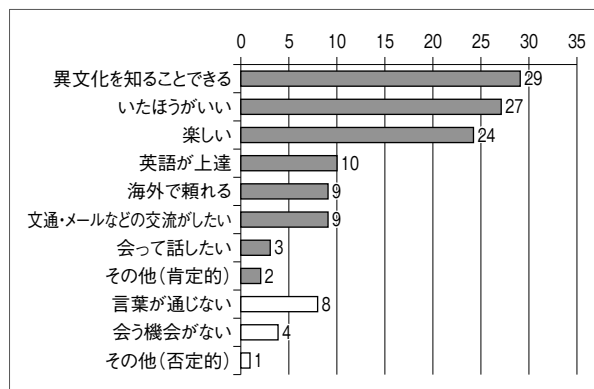


図7 質問2 (海外に友達がほしい)MA(総数126)

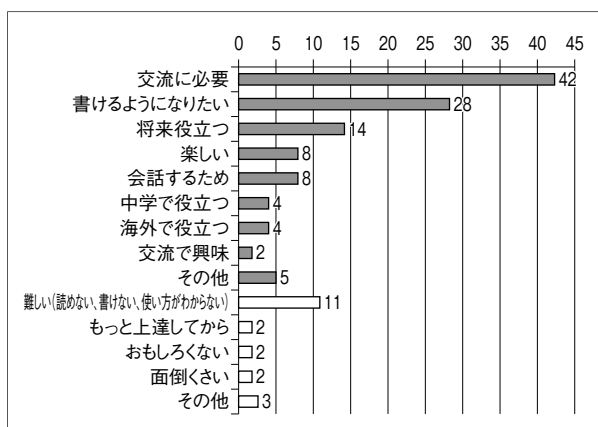


図8 質問3 読み書き練習について(総数135)

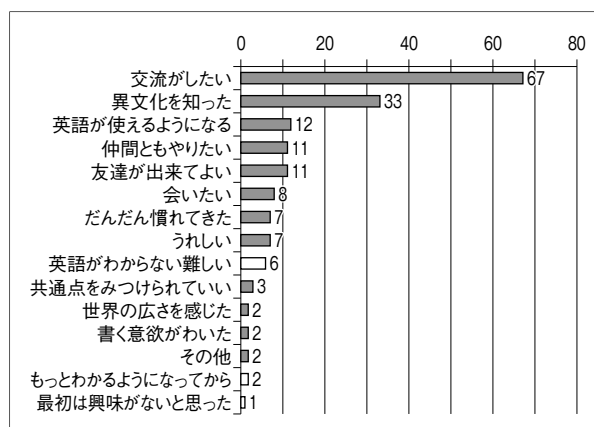


図9 質問4 (全体を通しての感想)(総数174)

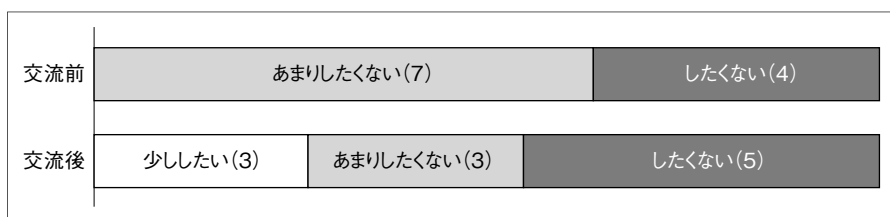


図10 交流前に読み書き練習に否定的だったグループ(11人)の比較

指導を含め、対策を考えなければならない。

交流前に英語の読み書きに消極的な姿勢をみせた子ども十一人の意識の変化を探るためこのグループについて追跡調査したところ、十一人のうち三人が「少ししたい」と興味を抱くようになった。「あまりしたくない」と書いた子どもの中のうち、二人が「少ししたい」と積極度を高めている(図10)。調査対象人数が少ないが、この結果は交流活動を推進し続ける上での好材料となり得る。

7-2-3 肯定的記述にみられる動機付けの内容

全体の記述のうち、肯定的・積極的記述に焦点を当て英語活動(国際交流を含む)に対して、学習者自身が自ら進んで意義を見つけ楽しむの為に学習をするintrinsic motivation(内発的動機付け)に結びつくと考えられる記述と成績や利益など実用的・実利をもとめて学習をするextrinsic

motivation (外発的動機づけ) に結びつくと考えられる記述に分類した (表 1)。分類にあたっては Ryan and Deci (2000) の基準 (The most basic distinction is between *intrinsic motivation*, which refers to doing something because it is inherently interesting or enjoyable, and *extrinsic motivation*, which refers to doing something because it leads to a separable outcome.) に従った。

学習効果が高く表れる内発的動機が、内発的動機を大幅に上回った。内発的動機に関する記述は多岐にわたるため 4 つに分類した。最も多いのは「積極的・感情(224)」で、うれしい、楽しいといった感情が表されている。無理強いされることがなく、純粋に楽しんだ様子がわかる。次に、「異文化への興味・関心(98)」が続く。交流で視野が広がったことが伝わる。異文化に対して興味を持つことが、外国語への興味関心にもつながることが期待できる。続いて多かったのが「英語上達への意欲(105)」で、これが全体の約四分の一弱である。英語が通じた喜びや、思ったように英語を読んだり書いたりすることができなかつた悔しさを感じた子どもによる記述もある。「友情に関する記述(54)」も目立った。交流相手に友情を感じることは、その相手が話す言葉に興味を持つきっかけになり得る。

また表で示したような外発的動機は否定されるべきものではない。外からのプレッシャーを感じてではなく (「先生ににらまれないように」、「叱られるのが嫌だから」など) 自分を認め (self endorsement) かつ、自主的に選択した (feeling of choice) 動機である。これらは自立性の現れで内発的動機につながるものであるとされている (Deci and Ryan 2000)。

ドルネエイ (2001) は人間の動機は、自己決定 (内発的) による動機と統制されている (外発的) 動機付けとの連続体としてとらえるとしている。つまり外発的動機が内発的動機に転化する場合もあれば、その逆もあり得る。国際交流活動の目新しさから、積極的・肯定的意見が導かれたということもあり得る。内発的動機が高まるのは、学習する内容が “intrinsically interesting” の時のみとされているが (Deci and Ryan 2000) 国際交流活動がいつも子どもたちの興味を引き付けられるわけではなく、毎回新しい発見があるとも限らない。回数を重ねるうちにマンネリ化し、活動自体に対する動機付けが下がることもあり得る。内発的動機が外発的動機、無動機に変わる恐れもある。それにはいかに対処するかがこれからの指導の重要なポイントになると考える。Deci と Ryan の自己決定理論 (Self-determination theory : SDT) においては、人間が生まれつき持つ、competence (有能性)、autonomy (自主性)、relatedness (関係性) という三つの心理的欲求を満たすことが内発的動機付けを高めるとしている。つまり学習者が自分は有能であることを味わう機会を提供すること、学習者主導で学習を進められるようにすること、さらに、教師や家族が学習を支援することが求められる。村野井 (2006) は第二言語学習によって、学習者自身が自分は何が出来るようになるのか (有能性)、そして、そのような他者と関わりを持つことが出来るのか (関係性) をしっかりと認識でき、それにより内発的動機が高まるとしている。二つの動機の厳密な分類は難しく、両方の動機を持つ子供も存在する。実際は Stockdale, Susan L.; Williams, Robert L. が述べるとおり、全ての行動は内発的動機と外発的動機の組み合わせであるので、子どもの様子を観察し、心理的欲求を満たしながら内発的動機付けを促していきたい。

表 1. 肯定・積極的コメント (総数 517)

内発的動機 (481)	積極的態度・感情 (224)	交流は楽しい	106
		交流できてうれしい	72
		交流したい	22
		わくわく、ときどき	9
		交流は良い	8
		慣れると楽しい	7
	異文化への興味・理解 (98)	異文化に触れたい	61
		外国の様子がわかる	21
		他の国にも興味	11
		共通点を知った	3
		世界の広さを感じた	2
	友情への関心 (54)	友達ができていい	39
		会いたい	11
		良い人々、優しい人々	4
	英語上達への意欲 (105)	英語で交流したい	42
		書けるようになりたい	32
		英語を上達させたい	22
英会話をしたい		8	
英語が好き		1	
外発的動機 (34)	恩恵を得たい (34)	将来役に立つ	14
		海外で頼れる	9
		中学で良い成績をとれる	4
		海外で役立つ	4
		人気者になりたい	1
		友人に自慢したい	1
		英語を教えてもらえる	1

表 2. 否定・消極的コメント (総数67)

消極的態度・感情 (15)	会う機会がない	4
	おもしろくない	2
	意味がない	2
	今はやりたくない	2
	面倒くさい	2
	その他	3
異文化に抵抗感 (2)	文化が違う	1
	海外に友人は作れない	1
英語に抵抗感 (50)	読み・書き苦手	33
	言葉が通じない	8
	英語が難しい	6
	もっと上達してから	3

7-2-4 否定的記述の概要

否定・消極的記述（表2）をみると、交流自体を否定的にとらえる記述（「面倒くさい」(2)「おもしろくない」(2)など）は比較的少ないが「読めない、書けない(33)」、「言葉が通じない(8)」、「難しい(6)」、「英語にもっと上達してから(3)」といった、言語に対する抵抗感に関連した記述の割合が高い。小学生時代から英語に対する苦手意識をもたせることは避けたい。子供が発する不満に耳を傾けたり、個人に対する配慮を続けながら全体の満足度を高めていく必要がある。

8. 結 論

海外の子どもと英語で交流することは、過半数の子どもに好意的に受け止められたことから、仮説はおおむね検証できたと考える。また、英語の読み書き練習については交流前、後ともに積極的な姿勢を示す子どもが過半数を占め、高学年で実施することについて抵抗感は少ないと考えられる。国際交流に関する自由記述も肯定的な意見が大部分を占め、その内容も内発的動機に関するものが外発的動機に関するものを大幅に上回った。読み書き練習の動機付けを目指して行った国際交流はおおむね効果があったと言えよう。交流に抵抗感を感じる子どもも交流前・後ともに存在する。この場合、英語に関して苦手意識を持つ子どもの割合が高い。小学校から英語嫌いを出さないよう、無理強いすることなく個人的なアプローチも必要になろう。本実践のような交流は姉妹都市・姉妹校などを持つ地域、学校を中心にすでに行われているがそれ以外の場合は相手を選ぶことから始めなければならない、実行までにはかなりの困難を伴う。インターネットの交流サイトなどで交流校を募る方法も時間と労力を要する。また相手と交渉する英語力が求められる。さらに英語のみの交流では、前述のとおり子どもにとっても指導者にとっても大きな負担となる（オーストラリアからのメールはほとんど和訳する必要があった）。海外から届く英語のメッセージについては、指導者側で要約したり訳したりする負担がある。また発信させる際は手紙のひな形を作って、挨拶や簡単なフレーズを教えたり、単語を書き入れさせたりという手間がかかる。松川（2004）にあるように、こういった交流には煩雑さが伴い、展開がストップしたり長続きしない場合がよくあるということも事実であろう。その理由の一つに、英語を学ぶ日本の小学生にとってのメリットの大きさに比べ、相手にとってのメリットが小さいことがあげられる。そこで、今回のインドの交流校のように、日本語を学ぶ英語話者を選ぶことは長続きさせる一つの要因となろう。日本語を授業で学ぶ学校は世界各地に存在することが国際交流基金などで把握されている。その資料をもとに希望に応じて、交流校を探せる制度が自治体や文部科学省などによって整備されることを望む。今回は実現しなかったが、ウェブカメラや電子会議などで交流できればスピーキング・リスニング活動もでき、国際交流の意義も深くなる。手間はかかるとしても、実際に海外の子どもたちと交流した経験は強く印象に残り、その後の英語学習においてもよい影響を及ぼすのではないだろうか。

指導要領にある通り小学校の段階においては、小学校の段階にふさわしい体験的な学習ができるようにすることが指導者側に求められている。実際研究開発校の中には、研究内容を国際交流学習、

国語と英語を統合し海外でのディスカッション・プレゼンテーション能力を高める科目、特定の国について学習する科目などが提起されている（松川 2004）。今後もこのような、国際交流を目的とした研究・実践が行われると考えられるが、交流国の選定に当たっては、北米やイギリス一辺倒になることなく世界全体に目を向けるべきであろう。事実上、英語が世界共通言語になっている現在、英語はもはやネイティブ・スピーカーだけのものではないこと、ノンネイティブ・スピーカーでも十分に英語でコミュニケーションができる子どもたちがいることを交流を通して日本の子どもたちに知らせることは動機づけの面で意義深いだろう。英語活動において国際交流のみに頼ることは現実的ではないが「英語ノート」などで学んだ内容を実践に生かすことで応用力を身につけることが期待できる。子どもたちの内発的動機を高められるような国際交流を今後とも継続していきたい。

注：

1. 2002年の指導要領では「児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」と「外国語に触れる」という書き方だったが、新指導要領では「国際理解に関わる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること」と「コミュニケーション力の素地」を作ることが求められている。
2. プライバシーの問題で日本語を学ぶクラスの先生に断られたこともありオーストラリアで日本語を学ぶ学校探しは難航した。1987年連邦議会において、「英語、及び英語以外の言語（LOTE）」に関する政策The National Policy on Languagesが承認され、日本語は、LOTEにおける優先学習言語の一つとして学習が奨励されたもののNALSASプログラム（アジア言語文化特別プログラム）の2002年末での打ち切りによって、予算が削られ言語教師の雇用に当てていた教育機関では、日本語を科目として提供できなくなったり、初等前期課程（Kindergarten- 5年生）での学習者が各州で減少するなどの影響が現れ始めている。インドはアジアのなかでもっとも英語力が高い国でもある。インドでは325の言語が話されているが、この状況で高い教育を受けた人々がコミュニケーションの手段にする言語は、第一言語のヒンディーではなく、英語である。また交流校のように授業の科目として日本語があるのは、現在の所、デリー近郊で正課として10校である。また課外活動として20校、合計30校程度で日本語が教えられている。
3. N5のクラスについてはプレアンケートには参加したが都合により交流できなかったためポストアンケートの人数には含まれない。また、読み書き練習をしたくないと答えた児童がこのクラスの中になかったため、読み書き練習に否定的な子どもの数の比較（図10）には影響しない。

引用文献：

- アレン玉井光江（2009）「生きた文脈とリタラシー教育—小学校における実践からの提言」『英語教育』2009年1月号 pp.13-15.
- ゾルダン・ドルネエイ（2001）（米山、関 訳）『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』東京：大修館書店.
- バトラー後藤裕子（2005）『日本の小学校英語教育を考える—アジアの支店からの検証と提言』東京：三省堂.
- 朝比奈直美（2008）「これならできる外国語活動（44）」日本教育新聞、12月1日 p.4.
- 金森強（編）（2003）『小学校の英語教育』東京：教育出版、p.21.
- 菅正隆（2008）「『英語ノート』を使った『外国語活動』の授業」『英語教育』2008年9月号 p.12.
- 國本和江（1998）「E-mail交換による児童のWriting Skillと海外の文化の認識」『日本児童英語教育学会研究紀要』、pp. 79-90.

国際交流基金「日本語教育国別情報」参照日：2009年2月28日、参照先：<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2005/australia.html>

五島忠久 (1983) 『子どもが英語と出あうとき？児童英語教育の進め方』東京：アプリコット。

JASTEC 関東甲信越支部 調査研究プロジェクト・チーム (1999) 「子供の言語習得と文字ー日本の子供の英語学習における文字の役割について」『日本児童英語教育学会研究紀要』 pp.37-53.

樋口忠彦、金森強、國方太司 (編) (2005) 『これからの小学校英語教育』東京：研究社。

日野信行 (2008) 「国際英語」教育を通しての異文化理解『英語教育』東京：大修館書店、3月号、pp.30-32.

松川禮子 (2004) 『明日の小学校英語教育を拓く』東京：アプリコット。

村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京：大修館書店。

文部科学省 (2008) (2002) 「小学校学習指導要領」大蔵省印刷局。

横田玲子 (1997d) 「ホールランゲージの教室からーアメリカの言語教育事情『動物』のテーマ学習」『英語教育』東京：大修館書店、6月号、pp.34-36.

Brown, H. D. (2000). *Principles of language learning and teaching (fourth edition)*. New York: Pearson Education.

Deci, E. L., and Flaste, R. (1995). *Why We Do What We Do* p.47 New York: Penguin books.

Ryan, R. M., and Deci, E. L. (2000). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25, pp.54-67.

Williams, R. L., and Stockdale, S. L. (2004). Classroom Motivation Strategies for Prospective Teachers. *The Teacher Educator* 39, 3. pp.212-230.

資料：

資料1. 日本の子どもたちのメッセージ (例)



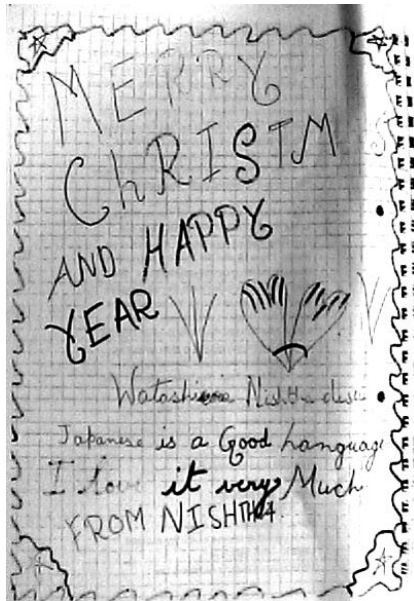
16
 Dear Naman Arora
 My name is MISAKI
 I am from Nijbo, Elementary,
 Sado Island. I am 12 years old,
 My birthday is JULY 13, I like
 Disney, kendo, and music (KAT-TUN
 (Arashi) 嵐 = (KANJANI EITO) 関ジャニエイト)
 You're friend, MISAKI

資料2. オーストラリアの子どもからのメール (例)

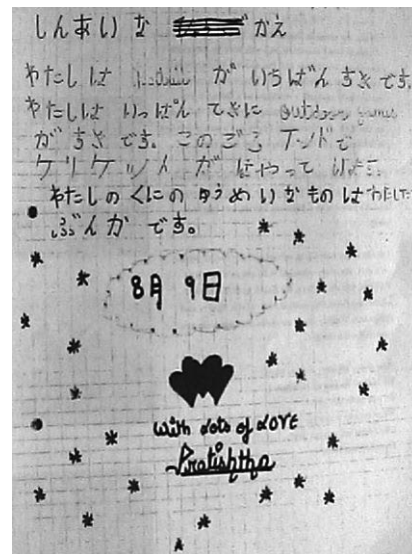
Hello, my name is Regina Hong. My parents came from China before I was born, so I was born in Australia. I have long, black hair and I'm about 1.47 metres tall. (中略) At school, my favourite subjects are Math, Sports and computers. I enjoy these subjects because I always have fun with them. How many siblings do you have? What time do you go to school? Do you have any pets? What is your favourite subject at school? I look forward to your reply. From Regina Hong

資料3. インドの子どもからの実際の手紙 (例)

(1) (英文) "Japanese is a good language..."



(2) (英文) "...with lots of love..."



資料4. プレアンケート (抜粋)

質問1 あなたは英語の時間が好きですか？ ひとつ選んでまるで囲んでください。

質問2 英語を書いたり読んだりする練習をしたいですか？ ひとつ選んでまるで囲んでください。

資料5. ポストアンケート (抜粋)

質問1 オーストラリア (インド) の子供たちから手紙をもらって、どう思いましたか？ 自由に意見を書いてください。

質問2 海外に友達を作ることにどう思いますか？ 自由に意見を書いてください。

質問3 海外の子供たちとの交流後、英語の読み書き練習を試みたくなりましたか？ 自由に意見を書いてください。

質問4 海外の子供たちと交流して、感じたこと、思ったことを自由に書いてください。